

先人の知恵から

43

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

ここまで続けていると同じような諺を載せないようにと過去の諺を振り返る。まあ、似ていてもご勘弁と言うことで、少し飛ばしつつ、最後まで行きたいと思っている。

今回も「夕行、チ行、ツ行から」以下の7つ。

- 短気は損気
- 単糸線たんしせんを成さず
- 短を捨て長を取る
- 知恵多ければいきどお 憤り多し
- 父ちちちちたり子ここたり
- 塵ちりも積もれば山となる
- 杖すがに継るとも人に継るな

<短気は損気>

短気を起こすと、人との交わりが壊れたり仕事も上手くいかなかったりして、結果的には自分の損になるということ。

子どもたちの中には、半分ゲーム依存になっている子がいる。こういう子どもたちは、結構イライラしやすく、ちょっとしたことで切れる。その結果友人関係を壊してしまう。ただでさえ、ゲーム依存で不登校気味な子が、友人関係を切ってしまうと、学校に行く理由がさらに減る。したがってそのまま不登校が続いてしまうことさえある。そういう子どもたちによく伝えるのがこの諺である。

ある子がカウンセリングに来た時に、話している中で、突然切れ、そのあたりにあったティッシュボックスなどを投げた。物を投げることを制し、イライラするなら帰ってよいと伝えたところ、帰っていった。しかし5分くらいで戻って来た。落ち着いたからと。こういうことが大人の引きこもりにもみられる。大人の場合、帰ってくるまでに何日もかかることもある。

暴力的なことは許さないなので、そういうことがあれば出て行ってもらう。そして頭

を冷やしてもらおう。これで関係が切れるかと言うとそうでもない。彼らにとっては話し相手がほかにいないからである。最近はおオンラインで仲間を作っているから、カウンセラー以外にも話し相手はいるかもしれない。それでも戻ってくる。オンラインでも仲間関係を壊してしまうことさえあるから。

戻ってきたところで、普通に「お帰り」と言う。謝っても謝らなくても、そこには触れない。その代わり、人と関わっていくことの大切さ、友人を持つことの大切さ、意見がぶつかっても、喧嘩をしても仲直りして、関係を修復すること、それは人間にしかできず、それが今後の人生において大事な力になること、などを伝えている。

物を投げたり、怒って帰ったりしても、その後戻ってきてからは二度とそういう行動は見られない。しっかり話しあうことがいかに大事かということでもある。

英語でも同様の諺がある事から、全世界共通で、短気を起こすと自分のためにならないと言われているのがわかる。この諺は伝えるが、自分の損になるから短気を起こさないとは中々ならない。誰でもカッとすることはある。大事なのはどうやってその気持ちを抑えるかだ。アンガーマネージメントなどを学ぶ人も増えた。深呼吸をする、その場を離れる、10数える、等短気を起こしやすい人には様々な方法を伝えてはいる。それでも気持ちが抑えられず、カッと成って、何か問題行動を起こしてしまったら、どうその後始末をするか、それが問題でもある。その後始末が上手くできることも短気の対処法になるだろう。

英語では・・・

Anger and haste hinder good counsel. (怒りと焦りは良い助言の邪魔になる)

Short temper is bad luck.

Haste makes waste. ともいう。

<単糸線を成さず>

人間は一人では何もできないというたとえ。蚕が出した一本の糸は、何本かより合わせなければ線にならず、何もできないことから。出典にはこのあとに、「こしやうあによ孤掌豈能よく鳴らんや (片方の手だけでは音が出ない)」とある。

出典 すいこてん 水滸伝

子育て中の母親と話していると、父親が非協力的と愚痴を言うケースは多い。仕事をしていて忙しいのは仕方がないとしても、家にいる時は、少しでも手伝ってほしいと思うのは当然だろう。しかし、詰ったりすれば、父親はへそを曲げるだろう。そこで母親たちにこんな諺があるよと伝える。

子どもを育てる際、父母が揃っているなら、二人で育てるとバランスが良い。糸が一本だけでは切れやすく、二本より合わせることで太く強くなって、切れにくくなる。二人一緒が良いのだ。二人で協力し合うことで、子どもは健やかに育つのだ。諺を出しながら、このように言うと、父親にも説得力があるのではないかと伝える。

上手く父親に伝えることが苦手な母親が増えているので、何かしら具体的な言葉、セリフを用意しなければならない時代にな

っている。諺はそんな時、とても役に立つ。

<短を捨て長を取る>

短所や欠点を捨てて、良いところだけを選び取ること。是非を見極め、優れた点を自分のものとする。出典には「若し能く六芸の術を修めて、この九家の言を觀、短を捨て長を取らば、則ち方方の略に通ずべし(かりに儒学の六芸を習得し、この諸子九家の思想を読み、短所を捨てて長所を取ったならば、あらゆる方面の大略に通じることができる)」とある。

出典 漢書

人はついつい悪いところ、欠点、短所ばかりに目が行く。子のマイナス面ばかりを取り上げて、そこをつつく親がいる。そうになると、子どもは自信を無くし、自分はダメな人間だと思うようになる。苦手なものは苦手とし、得意を伸ばす。これは発達障害の子どもへの対応でもこうあるべきと言われていることだ。

しかし、未だに、家庭でも、学校でも、社会でも、長所を認め伸ばす方向には中々っていない。数学ができる子がいても、国語が苦手だと、国語を頑張れという。縄跳びが苦手な子がいれば、何度も何度も練習して、跳べるようにしようとする。頑張っても何かを達成することはよい経験ではあるが、頑張ってもできないものもある。その判断は大事である。「やればできる」「頑張ればできる」と言うのは簡単だが、やる方は大変なのだ。

そこに時間を費やすより、得意分野を伸

ばす方が、子どもは頑張れる。もっともっと得意分野を伸ばすと、伸びのない分野についても、子どもが頑張ろうとするようになる。それを待って応援する方がずっとスムーズに伸ばすことができるだろう。

<知恵多ければ 憤り多し>

知恵や知識を多く身につけてくると、人は世の中の矛盾や不合理に気づくようになり、理想と現実のはざまに立って悩み、憤慨することが多くなるということ。

「旧約聖書」の「伝道の書」にあることは。In much wisdom in much vexation. から。

子どもたちが中学生くらいになると、大人に対し厳しい目を向けるようになる。大人の汚さ、醜さ、ずるさ、そんなものにもだんだん気づくようになる。世の中の不条理、政治の怪しさなどなど。

理想と現実のギャップにも気づく。それは自分自身も含めてである。自己評価が下がったりするのもそのせいである。

急に子どもが反抗的になって、批判してくるようになると、「可愛くて素直だったあの子が・・・。」と嘆く。どう対処したらよいただろうかと悩む。

そんな親に対してこの諺を伝える。子どもが成長したから、子どもが様々な知識を得て、理解してきたからこそ、大人への厳しい目、政治や社会への厳しい目が生まれたのだと。親として、大人として、子どもの正義感やまっすぐな考え方を認めていけばよい。その中で、子どもは自ら、何が正しくて何が間違っていて、そして世の中で生きて

いくうえで、ぶつかったり、自分を曲げたりしていかざるを得ないのだと学ぶのである。

この時期になったら、親は、子どもから少し離れて、見守ってあげることが大事になる。もう、幼くて、親を求め、親の言いなりになっていた過去の我が子ではないのだ。

<父^{ちち}たり子^こたり>

父が父としての道を行えば、子も子としての道を尽くす。家族がそれぞれになすべきことをすれば、一家は安泰であるということ。。

出典 論語

モデリングという言葉がある。誰かをモデルとし、そのモデルを意識することで、自分自身をそのモデルに近づけようすることである。師とする人、尊敬する人等がそのモデルとされることが多い。父親や母親を尊敬する人もかなりいると思う。そういう人は自分の父親や母親をモデルとして、自分も父親や母親のようになりたいと思い、日々意識的にも無意識的にも、言動を真似ていく。そうしているうちに父親や母親と似た人間として成長するのである。

父親が社会生活上の意味を強く持つモデルであるのに対し、母親は、子育ての師であり、愛情をどのように与えるかというモデルでもある。最近はその違いも無くなってきてはいるが・・・。

父母は子に「父親とは」、「母親とは」と改めて何か教えたり指導したりするものではなく、自分の言動を見せることで子に伝えていく。モデルとはそういうものである。

“背中で語る” “背中を見せる” というのが

まさにそれであろう。

家族といえども共同体である以上、それぞれ役割がある。子のいない夫婦であれば、夫は夫としての役割、妻は妻としての役割を果たす。子がいれば、父親は父親として、母親は母親として、その役割を果たす。そういう姿を見ていけば、子はこの役割を自ずと見つけ、その役割を果たしていく。

例えば、夫が夫としての役割を十分に果たしていなければ、妻は不満を感じ、夫婦は揉めることになるし、場合によっては離婚という話になる。子どもがいる家族で、母親が母親の役割を果たしていなければ、父親か子どもがその役割を担うことになってしまう。そうすると、誰かが必要以上のストレスを受けることになり、家族が上手く回らなくなるだろう。ヤングケアラーという問題にもつながりかねない。

子どもは子どもらしく子どもの役割を果たすことが、子どものいる家庭では大事である。そのためには両親が、子どもらしい役割を果たせるよう子を守らねばならない。と言うことはすなわち、両親がそれぞれの役割をしっかりと果たすということに他ならない。

家族の役割が上手く果たされていない時、この諺を出して説明する。

<塵^{ちり}も積もれば山となる>

わずかなものでも、積もり積もれば山のように大変な量になるということのたとえ。小事だからといっておろそかにしてはいけないといういましめ。「塵積もりて山となる」ともいう。いろはがるた（江戸）の一つ。

この諺は有名なので、だれもが知っているだろう。ほんのちょっとしたことでも、積んでいけば大きなことが成し遂げられる。例えば毎朝3回腹筋をしたとして、それを毎日続ければたかが3回でも腹筋が付く。日々の努力が成果を上げるということは誰もが知っているが、いきなり、腹筋30回で頑張ろうとしても三日坊主になるのがおちである。ほんのちょっとしたことを毎日続けることの方がずっと効果的である。

この諺と一緒に説明するのが、角度である。今進んでいる道をそのまま進むのと、たった一度角度をずらして進むのと、その未来の自分の位置を考えてもらう。先に行けば行くほど、今のまま進むのとは大きな開きが出る。たった一度、されど一度なのである。その一度を時々繰り返していけば未来はもっと大きく変わる。

人は変化に対し少なからず抵抗がある。現状維持が一番安心なのである。しかし、何かしら不都合があるなら、変化をせざるを得ない。そんな時にこの諺を使って、ほんの少し、ほんのちょっとした変化、ほんのちょっとした努力、半歩くらいの前進を提案する。そうすると変化へのハードルはぐっと低くなる。ちょっと変化した先は、今までとは大きく違うものになるのだ。

<杖にすが継るとも人に継るな>

むやみに人の行為や助けをあてにしてはいけないといういましめ。人に頼り過ぎてはならないということ。

杖と言うのは大体が丈夫にできている。体重をかけるのであるから当然である。簡

単に折れるようでは使い物にならない。

しかし人は杖とは違う。そもそも、杖は自分の思う位置に置くことができる無機物であるが、人は自分の思い通りにはならない。その人の考えや意志、思いと言うのもあるし、気分もある。両足があって勝手に動ける生き物である。だから、そもそも杖のように頼るには無理があるのだ。

それでも人は、人を頼っては裏切られたり、思うとおりにならなかったりして、頼った相手に対し文句を言っている。

子どもは親に頼らねば生きていけない。従って親は杖のようにどんと、強く構えていていただかねばならない。しかし、親も人である。不安定な人も、精神的に病んでいる人も、自分自身を支えることで手いっぱいの人もある。そんな時は、代わりの杖になりうる人を探さねばならない。祖父母であったり親戚のおじさんおばさんであったり、或いは全くの他人だったりもする。誰かに頼らねば生きていけない時期は、頼ればよいし、しっかりと支え、助けてくれる人もいる。そういう人を不幸にも見つけられないと、アダルトチルドレンになってしまうだろう。それはまた別の話である。

子どもといえども、小学校高学年にもなれば、自分のことは自分でかなりできる。親に頼らねばならないことは減るはずである。まして中高生ともなれば、電車やバスに乗って動くこともできるし、更に自分でできることは増える。高校生であればアルバイトをして働くこともできるのである。

そして18歳で成人である。成人であれば、契約もできるわけだし、自分のことはすべて自分でできるレベルになっているということになる。

ご飯を作ってもらい、洗濯も掃除もしてもらい、衣服は買ってもらい、場合によってはレポートも書いてもらう。そんな高校生や大学生を見ていると、頼りすぎと言わざるを得ない。親も手を出しすぎるのだが、親にこれだけ頼っていると、結局他人に対しても頼ることが当たり前になってしまうことも多い。しかし、他人は他人である。当然思うようにはならない。それで憤慨していても悪いのは他人に頼った自分である。

誰かを頼るときは、頼って大丈夫なほど、心も体も安定して、どんと構え、心の広い人なのか、ある程度信頼できるのか、そんなことを考えた上で頼るほうが良いだろう。身近にいるからとか、仲が良いからとか、そういう理由だけで頼って裏切られても仕方がないのである。だからと言って、全く人を信じず、頼らないというのも問題ではある。自分でいくら悩んでも解決できない時は、誰かに頼ることも必要だから。

ただ、人は杖ではないということだけはおぼえていたい。

出典説明

水滸伝・・・

明時代の長編小説。作者は元の施耐庵しのだいあんとも、また施耐庵の原本を明の羅貫中らかんちゅうが改訂したともいわれるが不明。宋の時代に、宋江そうこうを首領とする百八人の盗賊集団が山東省の梁山泊に立てこもって官軍に抵抗し、やがて滅びていく物語。百二十回本、百回本、七十回本がある。『三国志演義』『西遊記』『金瓶梅』とともに「四大奇書」の一つ。日本には江戸中期に伝えられ、江戸文学や講談などに影響を与えた。

漢書・・・百二十卷

中国の正史の一つ。『史記』に次いで二番目に成立した正史で、高祖から平帝までの前漢二百三十一年間の史実を記した歴史書。後漢の班固はんこが、父班彪はんひょうの着手した修史を引き継いで完成し、班固の死後、妹の班昭はんしやうが表十巻と「天文志」を補った。『史記』が上古から漢代までの通史であるのに対し、『漢書』は前漢一代だけの断代史であり、以降の正史の典型となった。

論語・・・二十卷

儒教の経典。『大学』『中庸』『孟子』とともに四書の一つ。孔子の言行や門人たちとの問答を記録した書で、孔子の死後に門人たちが編集したものとされる。孔子は諸国を回って仁の徳による政治を説いたが、本書は孔子の人物や思想を知るうえで極めて重要な資料である。

唐書・・・二百二十五卷

中国の正史の一つ。唐代の歴史を記した『旧唐書』と『新唐書』の総称。とくに『新唐書』を指す。九四五年に完成した『旧唐書』(二百巻)を宋の歐陽脩おうようしゅう・宋祁そうきらが補正して編纂し、千六十年に完成したのが『新唐書』である。